

「底が突き抜けた」時代の歩き方 358

「世界はどうしてこんなに美しいんだ！」 - フランクル『夜と霧』

フランクルの『夜と霧』を手にとると、結局のところ、本というものは読むだけでは全く十分ではないということをつくづく思い知らされる。本を読むという行為はありうるとしても、その本に自分自身が踏み込まなくては、本が「わたし」を読むという行為には遂に辿り着くことはできないだろう。『夜と霧』はそのことをたっぴりと思い知らせてくれる書物である。だから、「わたし」はこの本を読んだのではなく、本に読まれた分だけ、本に踏み込まれた自分自身を読んだにすぎない。

「いい人は帰ってこなかった」と冒頭に書きつけるフランクルは、そこで同時に、非常に苛酷な収容所でも「いい人」はいたんだよ、いや収容所だからこそ、曖昧さの余地なくくっきりと「いい人」を浮かび上がらせていたんだよ、といているようにも聞こえる。更に、その前の個所に目を移すと、被収容者番号としてしか存在しえない場所にも、人間と呼んでもよい「いい人」が紛れもなくいたんだよ、という声を響かせているのが感じられる。彼は被収容者番号についてこう記している。

《たとえば、近く被収容者が移送される、一定数の被収容者が別の収容所に移されるらしい、と聞いたとする。わたしたちは、それはまやかした、と考える。なぜなら当然、その移送とは「ガス室送り」だと、選ばれるのは病人や衰弱した人びとで、労働に適さない被収容者が、ガス室と火葬場をそなえた中央の大きな収容所で抹殺されるために淘汰されるのだ、と憶測するからだ。とたんに、すべての人がすべての人を敵に回した抗争が、グループ同士の抗争が始まる。一人ひとりが、自分と自分の親しい者たちが移送されないよう、移送リストから「はずしてくれるよう嘆願する」ことに、ぎりぎりの土壇場まで死にものぐるいになる。だれかが抹殺をまねがれれば、だれかが身代りになることははっきりしていた。この際、問題なのは数だけ、移送リストをみたと被収容者の数だけなのだ。一人ひとりにはまさにただの数字であって、事実、リストには被収容者番号しか記入されなかった。

たとえばアウシュヴィッツでは、被収容者は到着するとすぐ、持ち物をすべて取りあげられ、身分を証明するものをいっさい失うのだが、それでも名前や職業はあった。それをいろいろ利用することも、あるいは可能だったかもしれない。しかし被収容者を（たいていは入れ墨で）識別でき、したがって収容所員が関心を示すのは、被収容者番号だけだ。監視兵や看守^きがある被収容者のことを、多くは「怠慢」の嫌で「報告」しようと思っても、名前は訊かない。ズボンや上着やコートの所定の位置に縫いつけてある番号にちらと目をやり、メモするだけだ（この行為はその結果のためにきわめて恐れられていた）。》

収容所では被収容者番号にしか関心が示されないのは、被収容者は番号で呼ばれることで十分事足りたからだ。つまり、収容所では番号以上の中身を持って存在する必要がなかったからだ。だから、大半の被収容者は何番という数字に見合った存在の仕方をして、移送リストに記入される番号に最大の関心を払っていたのである。このことを見据えて、フランクはこういう。

《「番号」119104という被収容者が、「心理学者として」強制収容所で経験したことを記述しようとする今、まず心にとめておいてほしいのは、言うまでもないと思うが、この被収容者が「心理学者として」強制収容所で働いていたのではない、ということだ。最後の数週間をのぞけば、医者としてもなにもしなかった。これは、わたし個人ではなく、ごくふつうの被収容者が経験した収容所生活を書き記すのがここでの目的である以上、重要なことだ。わたしは、自分がそうした「ごくふつうの」被収容者だったと、ただの119104番でしかなかったと、胸を張って言いたい。わたしはほとんどの期間、土木作業員として、あるいは鉄道建設現場の重労働者として働いていた。ひと握りの運のいい同僚が、いくらかでも暖房のきいた診療棟^{あんきょ}で紙の包帯を作っていたあいだ、たとえばたったひとりで道路の地下に下水用暗渠を掘っていた。》

彼は自分が「ごくふつうの」被収容者であり、「ただの119104番でしかなかった」ことを、「胸を張って言いたい」と記す。「ごくふつうの」被収容者と区別される「心理学者として」強制収容所で働いてきたわけではなく、自分が「ごくふつうの」被収容者として過ごすことによって、彼らと同じ気持を味わうことができたといっているように聞こえる。したがって彼は、「番号」119104という被収容者が強制収容所で経験したことを、「心理学者として」記述しようとするのである。収容所では「心理学者」でもなんでもない、「ただの119104番でしかなかった」が、その119140番の生活について書き記そうとする自分はいま、「心理学者」であるということなのだ。つまり、119104番の職業が「心理学者」であったとしても、収容所では「心理学者」として取り扱われず、自分も「ごくふつうの」被収容者として119104番を生きてきたということである。だから、フランクという名前を取り戻したいま、「心理学者」として119140番の生活について書き記す必要性を、自分自身に促迫しているのだと思われる。

《ここでわたしは、はじめこの本を実名ではなく、被収容者番号で公表するつもりだったことに留意をうながしておきたい。経験者たちの露出趣味に抵抗感を覚えたからだ。しかし、匿名で公表されたものは価値が劣る、名乗る勇氣は認識の価値を高める、と自分に言い聞かせ、名前を出すことにした。わたしは事実のために、名前を消すことを断念した。そして自分を晒け出す恥をのりこえ、勇氣をふるって告白した。いわばわたし自身を売り渡したのだ。》

「心理学者として」収容所で働いていたのではなく、「ただの119104番」として収容所に入れられていたのだから、119104番として自分が経験してきた収容所生

活について記したこの本の公表は、実名ではなく被収容者番号で行うのがふさわしいと考えたからではなく、「経験者たちの露出趣味に抵抗感を覚えたから」、「被収容者番号で公表するつもりだった」。しかしながら、いくつかの理由から匿名を撤回して、「名前を出すことにした」。収容所でいかに名前を奪われて番号化されていたとはいえ、フランクはフランクであつたのだから、実名での公表であっても差し支えないと思われるが、問題は、彼が「わたし自身を売り渡した」と捉えているところにあった。これは一体、どういうことなのだろう。

実名での公表に抵抗感を覚えたのは、強制収容所についての数多くの事実報告の発表が実名で行われているところに、「経験者たちの露出趣味」を感じ取っていたからだ。ところが、フランク自身も実名での公表に踏み切ることによって、どのような理由を付け加えようとも結局、「経験者たちの露出趣味」の仲間入りをすることになってしまった。彼はそのような自分自身への異和感を、「わたし自身を売り渡した」と自己批判していたのだ。だが、一体どこへ「売り渡した」のか。実名での公表に「経験者たちの露出趣味」を感じることに、「わたし自身を売り渡した」と感じることに、とてつもない大きな落差が存在している。「経験者たちの露出趣味」の前には立ち止まる必要性を少しも覚えないが、「わたし自身を売り渡した」という捉え方の前からは、平然と立ち去ることはできない。

「わたし自身を売り渡した」というフランクの捉え方には、根源的な問題が潜んでいるように思われる。常識的にみるなら、本を書いて商品の流通機構に乗っかっていくこと自体が、自分自身の記述を商品として売り出すという意味で、「わたし自身を売り渡した」と切り取ることができるけれども、フランクがそんな浅薄的な意味あいではないことは、実名での公表にかかわって自己批判的に捉え返していることから明白である。商品化の意味あいなら、匿名か実名かの差異は問題にならないからだ。どうして匿名ではなく、実名での公表なら、「わたし自身を売り渡した」ことになるのか。逆に問うなら、被収容者番号でもし公表していたとすると、「わたし自身を売り渡した」ことにならないのはどうしてなのか。ここで、「ただの119104番」として収容所の中で存在してきたことがどういうことであつたのかが、改めて考え直されなくてはならない。

もし被収容者であるフランクが「心理学者として」強制収容所で働いていたとすれば、彼は確かに強制収容所の中で「わたし」として存在していた。心理学者であることのなかに、彼は「わたし」を発現していたからだ。しかしながら、「ただの119104番」のなかには「わたし」は存在していなかった。つまり、「わたし」は徹底的に剥奪されていた。したがって、収容所生活とは被収容者の誰にとっても、「わたし」を剥奪されている状態にほかならなかった。番号で済まされるとはそういうことであつた。もちろん、このことはいくら番号であっても一人ひとりの精神的なありようは異なる、ということとは別問題である。「わたし」は各々に異なる精神的なありようのなかに閉じ込められて、精神の外へと一歩でも出ることを禁じられているという問題であつた。

フランクルを含めて経験者たちが収容所生活について記述することは、「わたし」を徹底的に剥奪され、「わたし」がかろうじて各々の精神世界のなかに長期間閉じ込められた集団生活で、生き延びることを最優先して人間というものはどのようなことを考え、行動するかという、実験的で根本的なこの一点への考察を抜きにしてはありえなかった。通常の日常生活とは異なる、自分が死ななければ誰かが死ぬ羽目になるという、たえず生死を目の前に突きつけられている極限状況下での人間に対する考察が「売り」に値するのは当然であったかもしれない。この「売り」を特質と解するなら、どのような記述もその特質をかかえている以上、「売り」は記述にとっては自然な行為であった。収容所の経験者たちが生還してから、現在の生活にも重たく申し掛かってくるかつての収容所生活が、自分の生涯に投げかけている意味を深く手探りたくなる欲求に駆られるのはあまりにも必然的な欲求であった。

自分が味わった特殊な経験を世に公表してみたいという「露出趣味」があるかもしれないし、その経験の記述は売れるという打算も絡んでかもしれない。あるいはまた、このような、人間にとってあまりにも苛酷で悲惨な経験を人類は二度と繰り返してはならないという、警鐘と平和への祈りを発端としているかもしれない。さまざまな動機に根ざして各人の収容所生活が記述されていくとしても、その記述の底にはいずれも一様の河が流れているのを見逃してならない。その河は、「苦悩という情動は、それについて明晰判明に表象したとたん、苦悩であることをやめる」という文字を刻んでいるにちがいない。フランクルは、『エチカ』のなかのスピザノのその言葉を書き留めている。おそらく収容所生活から解放された途端、どの経験者たちにも等しく苦悩が襲いかかってきた筈だ。要するに、収容所生活はそれ以後も、苦悩のかたちをとって経験者たちを悩ましつづけたのである。

収容所から解放された経験者たちは、その後自分たちを襲ってきた苦悩からも解放されることを願って、その苦悩の淵源であるかつての収容所生活が自分にとってなんであったのかを明らかにするために、その意味を問い記述しはじめたと推測される。スピノザがいうように、苦悩の正体が明らかにされないかぎり、いつまでも苦悩に追い詰められなくてはならないからだ。経験者たちの記述の底には、苦悩から逃れようとする苦悩が底流しているのは間違いない。フランクルの『夜と霧』だって、そうにちがいない。したがって、自分の苦悩に終止符を打ちたいために、かつての収容所生活について記述すること自体は必然的な欲求である。しかしそうであるなら、記述の公表も、当然実名での公表も余分なことであるのは明白だ。だが、記述の公表が「わたし」の知らない「わたし」にまで届けたいという記述の幻想と密接にかかわっていることを考えると、その行為自体も自然な欲求とみなせる。

しかし、フランクルは実名での公表にどうしても引っ掛かる。実名にする必要性がどこにあるか。苦悩の解明にはもちろん、かわりない。なぜ実名でなくてはならないのか。この問いは、自分たちが被収容者番号で徹底的に取り扱われてきたという問題と深

くかかわっている筈だ。これまでの生涯で一度も収容所生活に見舞われたことのない立場からフランクルの気持ちに想像を交えて分け入っていく以外ないが、収容所で死んでいった者も、収容所から解放された者もすべて、被収容者番号によってなされていたと推測される。被収容者番号で流通していた収容所生活についての記述を実名で公表することにフランクルがどうしても異和感を抱くのは、匿名の世界を実名の世界で照らし出すような疑問を感じていたからではなかったか。あるいは、匿名の世界を実名の世界に引きずりだすような嫌な手応えを感じ取っていたからではなかったか。

収容所生活で番号ではなく実名で呼ばれる者といえば、それは当然、被収容者ではなく、彼らを監視し支配する者たちであった。実名を剥奪されている被収容者からすれば、実名で収容所に勤務している者たちはすべて特権を享受している側であった筈だ。おそらくフランクルはこの被収容者たちのまなざしをけって忘れていなかったのである。このまなざしからすれば、ただの番号で取り扱われた収容所生活についての記述を実名で公表するのに異和感を抱くのは当然であった。どんな異和も感じることもないほうがむしろ不思議であった。つまり、記述されているただの番号で取り扱われてきた収容所生活そのものが、実名での公表に異議を唱えていると捉えることができるかもしれない。実名を剥奪されてきた世界から実名で公表できる世界へと帰還してきて、「人間はなにごとにも慣れる存在だ」という冷徹な事実を立証するように、実名での公表を当然視する感覚に、フランクルは根源的な異和を感じていた筈だ。

「人間はなにごとにも慣れる存在だ」とドストエフスキーはいったが、そう定義したとき彼は同時に、人間はそうすぐには慣れることのできない精神の核のようなものを他方で心の奥底にかかえこんでいることも洞察していた。そうでなければ、収容所から解放された後も長年にわたって経験者たちが苦悩からの解放を願うこともなかった。実名での公表という全く取るに足りないようにみえる問題は、匿名に覆われた世界について記述するその公表の仕方が、その世界にふさわしいかどうかという問いを突きつけていたといえる。少なくともただの番号で取り扱われる収容所生活では、実名の流通は特権の世界にみえていた筈だからである。フランクルが実名での公表に躊躇したのは、収容所生活を引きずっている感覚からすれば当然のことであり、彼自身が実名での公表に踏み切らざるをえなくなったとき、彼は「わたし自身を売り渡した」という思いにどうしてもとらわれねばならなかったのだ。

繰り返すが、フランクルが実名での公表にどうしても引っ掛かるその手付きのなかに、彼自身の収容所生活を引きずっていたのである。もちろん、彼が収容所生活とは全く無関係な心理学上の著作を実名で公表することに、ほとんどの人がそうであるようにこだわることはなかったであろうが、収容所生活についての記述では公表の仕方はそう簡単ではなかった。彼は別の個所で「いい人は帰ってこなかった」と記述している。このことは、「いい人」は実名を剥奪されたまま、囚人番号のまま葬られていったということをも意味している。その「いい人」の背後には、普通の被収容者たちの無数の屍が累々

と積み重なっていることを想像するなら、つまり、自分たちのように実名の世界へと遂に生還することのなかった彼らのことを一瞬でも思いやってみるなら、彼らを含んだ収容所生活についての記述を実名で公表することに、どこかで彼らを裏切ったような気持ちにとらわれたとしても不思議ではない。

「いい人は帰ってこなかった」とためらわずにいい、実名での公表に「いわばわたし自身を売り渡した」と容赦なく自分を斬りつけるフランクフルに透徹した覚醒を感じて止まないが、いうまでもなく実名での公表にすら「わたし自身を売り渡した」と疼痛を覚えざるをえないそこに、収容所生活が息づいているのが覗き込めるが、同時にその疼痛に収容所生活を体験したが故の歪みも伴っていることも、彼はけっして見落とさない。そこで彼はどうしてもこのように書く。

《「まっただなか」にいた者は、完全に客観的な判断をくだすには、たぶん距離がなさすぎるだろう。しかしそうだとすると、この経験を身をもって知っているのは彼だけなのだ。もちろん、みずから経験した者の物差しはゆがんでいるかもしれない。いや、まさにゆがんでいるだろう。このことは度外視するわけにはいかない。そこで、いわゆるプライベートなことにはできるだけふれないことが、しかし他方、必要な場合には個人的な経験を記述する勇気をふるいおこすことが重要になってくる。なぜなら、このような心理学的探求のほんとうの危険は、それが個人的な調子をおびることではなく、かたよった色合いをおびることにあるからだ。そこで、わたしがここに書いたことを今一度、こんどは没個人的なものにまで蒸留し、ここにわたしが差し出す経験の主観的な抄録を客観的な理論へと結晶させることは、^{やす}安んじてほかの人びとの手にゆだねようと思う。》

どのような経験も部外者を排除する。それは当たり前だ。経験は部外者の排除によって成り立つからである。経験の「まっただなか」にいた者は当然ながら、その経験から距離をとれない。すなわち、経験そのものを外から見つめ直すことができない。逆に、部外者はどうしても経験から距離をとりすぎてしまう。したがって、その経験がどのように他の経験と比較できるかどうか、外から眺めることはできても、経験そのものを味わうことはできない。別のいいかたをすれば、「まっただなか」にいる者は「生きる」者であり、「行う」者であるのに対して、部外者は「見る」者である。ところが、記述することは、「生きる」＝「行う」ことと「見る」ことが一体化して重なり合うなかから生み出される行為にほかならない。「生きる」＝「行う」かぎり、「見る」ことはできないし、「見る」かぎり、「生きる」＝「行う」ことはできないという、双方の矛盾をどこかで解消しなければならないのである。

あらゆる記述がその矛盾を解消しているわけではない。記述という行為は基本的に「見る」ことにほかならないから、その行為のなかで「生きる」＝「行う」ことは忘れられている。というより、「見る」ことが「生きる」ことであり、「行う」ことであるというようにはどうしてもならない。フランクフルが経験した収容所生活に即して問題を追っていくと、《収容所生活を体験した者に、体験のさなか、彼自身を観察する暇^{いとま}などあった

だろうか。》と疑問を発していたように、自分の収容所生活を観察する目的をもって入所していたわけではなく、どのような記述も収容所から解放された後の行為であったということを忘れてはならない。体験中は記述など念頭になく、記述を始めたときはすでに体験を終えていた。したがって、記述できるのは、自分たち被収容者がどのような極限状況下での生存をしいられ、さまざまな思いがこみあげるなかでなにごとにも慣れていったということであろう。

経験者たちが記述する際には、走馬灯のように次々と頭のなかで駆け巡る収容所生活についての記憶を一つひとつ掘り起こしながら、丁寧に拾い上げていく作業を前提としている。要するに、記憶のなかの収容所生活にほかならないから、現実の体験そのものとは当然異なる。記憶によって仮構された体験であるけれども、記憶が現実の体験に基づいている以上、全く架空の、別に作られた体験であるわけではない。しかしながら、記憶は必ず体験そのものに歪みをもたらす。歪みをもたらさない記憶などないといってよい。だから、記憶によって辿られる事実の体験は嘘だと決めつけられるのではなく、どのような体験も歪められて記憶に残っていくことを踏まえて自覚的であらねばならない。同じ体験を共有し合っている、その体験について語る各々がそれぞれに異なるのは、体験のどの部分に力点を置くかによって記憶の保存の仕方に大きな差異が生じることを物語っている筈だ。

「経験の激流」の「まっただなか」ににいるということは、そのことによって相当強力な圧迫を受けていることを意味する。つまり、歪んでいる。そう、体験とは歪みのことかもしれない。強制収容所経験が極めて特殊で極限状況下での出来事であったとすれば、歪みも極めて特殊なものであっただろう。想像を絶する経験であればあるほど、記憶はもちろんのこと、経験者たちの視界も強力な歪みを受けずにはいられなかっただろうから、収容所からの解放は、経験者たちの世界を見る眼差しが収容所生活における圧倒的な重力によって被らされた大きな歪みからの解放が果たされるまで、永遠に続くという予測を我々に促している。収容所生活がもたらした経験者たちの眼差しの歪みは、その中にまだ収容所が聳え立っていることを色濃く映しだしているからだ。

いうまでもないことだが、収容所生活で被った眼差しの歪みは部外者の世界へと帰還すれば、やがて跡形も消え去って、収容所以前のようにどんな歪みも被っていない部外者と同じ眼差しを持つようになればいいし、それが最重要な課題だといっているわけではない。嫌な記憶や歪みはすっかり取り除いてしまえばよいという問題ではけっしてない。残念ながら、人間というものは一度受けた仕打ちは忘れられるものではないし、まして長期間の生死が隣り合わせの収容所生活を被った記憶や、そこでもたらされたさまざまな歪みを除去することはとてもできない。もちろん、意識操作によって除去できたかのように思い込めなくはない。それでも除去したわけではない。単に嫌な記憶や歪みを意識下に押し込めたにすぎない。押し込めたものはいつか必ず溢れ出すというのは鉄則である。

経験者たちはもはやどんな場合にも、部外者の群れのなかに融け込むことはできない。

収容所の記憶や眼差しの歪みが彼らを掴んで離さないからだ。そうであるなら、体験の「まっただなか」にいたときは、自分自身を観察する暇^{いとま}などなかったとしても、眼差しの歪みの「まっただなか」にいる間は、その歪みがどのような歪みであるかを解明する眼差しをつくりだすことによって、歪みから自分自身の力で抜け出す以外にないだろう。「苦悩という情動は、それについて明晰判明に表象したとたん、苦悩であることをやめる」というスピノザの言葉に倣っていえば、眼差しの歪みもまた、「それについて明晰判明に表象したとたん」、歪みであることをやめるにちがいない。

勘違いしてはならないのは、収容所生活によって被った経験者たちの眼差しの歪みは、けっして除去できるものではないから除去してはならないということではなく、彼らの眼差しの歪みのなかにくっきりと世界そのものの歪みが映しだされているから除去してはならないのである。ナチスの強制収容所は世界が病んでいることの明白な証拠だ。フランクルたちは本当は世界が病んでいる「まっただなか」に、いきなり放り込まれてしまったのである。したがって、彼らがそこで否応なしに被らざるをえなくなる眼差しの歪みこそ、世界が病んでいるその歪みを彼らの眼差しのなかにしっかりと刻み込んだものとして受けとめるべきだろう。彼らこそは世界の最大限の歪みを身をもって伝えるメッセンジャーの役割を負っているように思われてならない。

強制収容所に世界が病んでいることの証を覗き込むなら、経験者たちと外部者を区別する仕切りなどどこにも存在しないことに気が付く。世界の歪みは等しく経験者と部外者を包み込んでいるからだ。ただ経験者たちは歪みの中心地に立っていたために、歪みを集中的に被らざるをえなかったというにすぎない。世界の歪みの部外に立っているわけではない部外者もまた、世界の歪みを緩慢に被っている。強制収容所に放り込まれなかったから、彼らの眼差しは歪みを被っていないということではない。逆にいえば、病んでいる世界をつくりだしてきたすべての人々の眼差しが歪んでいたから、ナチスの強制収容所のようなものが生みだされてきたといえるかもしれないのだ。部外者の眼差しも歪みとはけっして無縁ではないことによって、経験者たちは収容所から解放されて部外者の世界へと帰還したからといって、ただちに部外者の眼差しを備えようとする事自体、無意味なことなのである。

経験者たちは身をもって世界の歪みを見た。そのために彼らの眼差しも歪んでしまった。部外者は世界の歪みを身をもって見る外の場所にいた。そのお陰で彼らの眼差しは歪みを免れた。しかし、部外者は世界の歪みを等しく浴びながら、世界の歪みを身をもって見る機会に恵まれなかったという歪みの「まっただなか」にいたことは間違いない。誰も進んでそんな機会に恵まれることを望まないだろうが。ずっとしつこく付きまとう苦悩と心の底から握手するために、苦悩のすべてを明らかにする必要があったように、自分自身の眼差しの歪みを世界の歪みとして見つめるために、歪みのすべてを明らかにする必要があった。なぜなら、彼らに刻み込まれた苦悩は世界の苦悩であったように、彼らが被った眼差しの歪みも世界の歪みにほかならなかったからだ。

世界の歪みの「まっただなか」にしながら、その歪みにけっして浸透されない内面が感動に打ち震える瞬間があることをフランクは書き留めている。

《とうてい信じられない光景だろうが、わたしたちは、アウシュヴィッツからバイエルン地方にある収容所に向かう護送車の鉄格子の隙間から、頂^{いただき}が今まさに夕焼けの茜色^{あかね}に照り映えているザルツブルクの山並みを見上げて、顔を輝かせ、うっとりとしていた。わたしたちは、現実には生に終止符を打たれた人間だったのに - あるいはだからこそ - 何年ものあいだ目にできなかった美しい自然に魅了されたのだ。

また収容所で、作業中にだれかが、そばで苦役にあえいでいる仲間に、たまたま目にしたすばらしい情景に注意をうながすこともあった。たとえば、秘密の巨大地下軍需工場を建設していたバイエルンの森で、今まさに沈んでいく夕日の光が、そびえる木立^{こたち}のあいだから射しこむさまが、まるでデューラーの有名な水彩画のようだったるときなどだ。

あるいはまた、ある夕べ、わたしたちが労働で死ぬほど疲れて、スーブの椀を手に、居住棟のむき出しの土の床にへたりこんでいたときに、突然、仲間がとびこんで、疲れていようが寒かろうが、とにかく点呼場に出てこい、と急きたてた。太陽が沈んでいくさまを見逃させまいという、ただそれだけのために。

そしてわたしたちは、暗く燃えあがる雲におおわれた西の空をながめ、地平線いっぱい、鉄^{くろがね}色から血のように輝く赤まで、この世のものとも思えない色合いでたえずさまざまに幻想的な形を変えていく雲をながめた。その下には、それとは対照的に、収容所の殺伐^{さつぱつ}とした灰色の棟の群れとぬかるんだ点呼場が広がり、水たまりは燃えるような天空^{うつつ}を映していた。

わたしたちは数分間、言葉もなく心を奪われていたが、だれかが言った。

「世界はどうしてこんなに美しいんだ！」

この「世界」とは人類が関与していない自然のことであるが、ただ単に美しい自然の無償さに被収容者たちが心を奪われているこの光景は、「現実には生に終止符を打たれた人間」であろうとも、収容所に差し込んでくる自然の輝きを無上の美しさとして感応しようとする人間の内面は、人間とのつながりを断たれても、自然とのつながりに励まされていく側面を強固に備えていることを浮かび上がらせている。フランクはまた、強制収容所で亡くなった若い女性について記述している。

《この若い女性は、自分が数日のうちに死ぬことを悟っていた。なのに、じつに晴れやかだった。

「運命に感謝しています。だって、わたしをこんなにひどい目にあわせてくれたんですもの」

彼女はこのとおりわたしに言った。

「以前、なに不自由なく暮らしていたとき、わたしはすっかり甘やかされて、精神がどうこうなんて、まじめに考えたことがありませんでした。」

その彼女が、最期の数日、内面性をどんどん深めていったのだ。

「あの木が、ひとりぼっちのわたしの、たったひとりのお友だちなんです」

彼女はそう言って、病棟の窓を指さした。外ではマロニエの木が、今まさに花の盛りを迎えていた。板敷きの病床の高さにかがむと、病棟の小さな窓からは、花房をふたつつけた緑の枝が見えた。

「あの木とよくおしゃべりをするんです」

わたしは当惑した。彼女の言葉をどう解釈したらいいのか、わからなかった。^{せんもう}譫妄状態で、ときどき幻覚におちいるのだろうか。それでわたしは、木もなにかいうんですか、とたずねた。そうだという。ではなんと？ それにたいして、彼女はこう答えたのだ。

「木はこういうんです。わたしはここにいるよ、わたしは、ここに、いるよ、わたしは命、永遠の命だって……」

フランクはなにも強制収容所にかぎらず、《人間はどこにいても運命と対峙させられ、ただもう苦しいという状況から精神的になにかをなしとげるかどうか、という決断を迫られる》一つの、たぶん極めて希な体験例としてここに持ちだしているのだ。「わたしをこんなにひどい目にあわせ」た運命を呪って短い生命を閉じていくのではなく、人間の精神について「まじめに考え」ることを促すひどい環境に放り込んだ運命に感謝し、病棟の窓から見える何も喋らないマロニエの木とも心を通わせることのできる世界を切り拓いて、彼女は永遠へと旅立ったのだ。「なぜ生きるかを知っている者は、どのように生きることにも耐える」というニーチェの格言を引いて、フランクは《わたしたちが生きることからなにを期待するかではなく、むしろひたすら、生きることがわたしたちからなにを期待しているかが問題なのだ》と説く。

どこにいても、なぜ生きるかを探している者は、どのように生きることにも耐えようとする、なぜなら、ひたすら生きることのなかにしかなぜ生きるかという問いは潜まないからだ。こう考えると、収容所から解放された後に収容所生活についてなにかを記述することにもまた、生きることの「まっただなか」での作業であることに気づく。記述することによって被収容者たちが味わった体験のもつ意味を深めたいのだ。もし自分たちの収容所生活が世界の歪みからもたらされているなら、その世界の歪みを明らかにするためにも、自分たちの体験のもつ意味を深める必要があるだろう。そしてもちろん、被収容者としての体験のもつ意味を深めることは、なぜ生きるかという問いを深めることにほかならない。問いを深めることは、「どのように生きること」の深さにも耐えることである。体験のもつ意味を深め、問いを深めていくなら、もはや人間が生きる戦場は収容所生活の枠組みを越えて広がっていく。そこで収容所から解放された後に生きることの絶望の淵に佇んでいる経験者たちにむかって、フランクは生きることには期待するのではなく、生きることがわたしたちに期待していることを深く聞き取らなくてはならない、と静かに語りかけるのである。死を前にした若い女性は収容所の運命を感謝するほどまでに自分の世界を自由に飛翔させ、一本の樹木の無言にまで耳を傾ける精神の自在さを発揮していったではないか、と。

2003年3月9日記